ラブコメっ！

勝田かき太

「すき」

このわずかな二文字が言えたら、どれだけ楽なのだろう。

このわずかな二文字で、私の人生が決まってしまう。

このわずかな二文字を発したとき。今までの関係ではいられなくなる。

だから怖くて今日も言えない。毎日言いたい「すき」の気持ちが。

でも、伝えなきゃ。

だって明日は卒業式。

このままの関係では、もう二度と会えなくなってしまうかもしれない。

◆

「すきです！」

私の頬は紅く染まり、心なしか耳も赤い。

「ありがとう、でもごめんね」

鏡に向かって告白の練習をしてみても、どうしても悪い返事が頭に浮かぶ。鏡に写った自分の顔を見て、少し恥ずかしくなる。

「すき」

いくら一人で口に出しても、だれにも伝わらないし、私のこの気持ちは収まらない。

この卒業式が本当に最後のチャンスなんだ。

身体中に蓄積された「すき」という感情が、今にも氾濫しそうで恐い。

誤って爆発させたら、私と彼との関係は、見るも無惨に消えてなくなってしまうだろう。

だからといって、伝えないで終わるなんて許せない。今日はもう寝よう。告白のときに目にクマがあるなんて嫌だから。

◆

◆

◆

◆

「ずっと好きでした！」

信じられない。彼の口から、この言葉が聞けるなんて。

人けのない丘の上。青い空と薄紅色の桜、そして彼のシルエットが、現実感を失わせる。

「わたしも、好きです！」

へ、返事をしてしまった……。胸がバクバクと鳴り、

頭がくらくらする。

「そうだ。制服の第二ボタン、貰えますか……？　わたし、ずっと夢見ていたんです」

彼は頷いて、すっとポケットに手を入れた。

「僕も、元からそのつもりだったんだ。どうか、受け取ってほしい」

ポケットから鋭く輝く鋏を取り出すと、第二ボタンの付け根にあてる。

――チョキン！

綺麗な金属音が鳴り響く。

同時に、音をたてて、私の恋が、人生が崩れるのを感じた。

まさか彼が、私以外の誰かに恋をしていたなんて。よりによって今日この日、私の目前で他の人に告白し、さらにオーケーを貰ってしまうなんて。

でも、これで。きっと彼は幸せになるんだよね。幸せになれるんだよね。

私には見せたことのないような満面の笑みが眩しい。

私は彼がだいすきだから。彼の幸せを祈っているから。彼の幸せが何より私の幸せのはずだから。

――でも、本当にこれで彼は幸せになれるのかな。これから彼の告白相手の本性を知って、もしかしたら彼は傷ついてしまうかもしれない。顔を曇らせてしまうかもしれない。きっと彼女だって、本当は彼のことなんかどうも思っていなかったのに、告白されたからって調子に乗って、私から彼を奪おうとしているに違いないんだ。彼の悲しそうな表情なんてもう見たくない。

ああ、なんてこと。このままじゃ、彼の心が傷められてしまう。私は彼を守らないと。だって私は彼が、本当にすきだから。

◆　◆

彼を守るために、私には何が出来る？

分からない。分からないけれど、なんとかしなくちゃ。

そういえば私、彼のことしか見ていなかった。彼が告白した彼女は誰なの。

彼と手をつないでいる女を確認すると、たしか彼のクラスで見かけたことがあるような気がする。同じクラスなのを利用して、あの人に言い寄ったのね。

今から私が彼のところに行って、私が告白をしたら…

…きっと彼は優しいから、困ってしまう。それにもう、温めてきた告白する勇気はしぼんでしまった。彼が告白した彼女が急にいなくなったりしても、やはり彼は悲しむだろう。

きっと今が彼にとって一番嬉しい時なのだから、この幸せな気持ちを傷つけることはしたくない。

彼の幸せを考えるなら。これからあの女と付き合って、そして訪れることになるだろう悲しみを回避するには。

彼の記憶を、一番幸せな状態で留めさせるしかない。

彼の時間を、最高の状態で、止めるしかない。

これは私にとってもつらい選択だ。だって私は彼とともに生きていきたかったから。結婚して、おじいさんおばあさんになって、老衰で死んでいく。そんなのどかな、幸せな家庭を夢見てきた。

でも、もう遅いんだ。彼は別の女に告白してしまった。私では、彼女の代わりになれないんだ。

彼のために、私ができることを。

私は私の人生をかけて、彼の幸せを願う。

彼と女の様子を窺っていると、女が、ふと彼から離れた。

今だ、と思う。

私は、女が離れていったのを見届けると、彼の背後からこっそり近づく。

ばっと彼に抱きつき、耳元でささやく。

「だーれだ？」

無声音なら、バレにくいと思った。

彼はきっと、いま告白相手の女から抱きつかれていると勘違いしている。

それはとても幸せだろう。

私は彼のポケットに手を入れ、鋏を取り出すと同時に、彼の喉元に突き立て、引き抜いた。

手に温かい液体が降りかかる。

彼の鼓動が、彼の暖かさが、私の手に染み込んでいく。

「だいすきだよ」

一度口に出すと、それはもう抑えきれない。彼を抱きしめる私の腕に、だんだんと強い力が漲ってくる。

「すき」

もう彼に会えなくなると思うと、悲しくなる。彼の最期の表情を、見届けたくなる。

でも、見るわけにはいかないんだ。だって、私は彼の愛した彼女じゃないから。

彼に一番幸せな気持ちで逝ってもらうために、彼には私だと気づかないでほしい。

ふと、彼の重みを感じる。

彼の身体の全部を、私に預けてくれているみたい。

私は、幸せだ。

脱力した彼の背を桜の木の幹に預け、ふと自らの腕を見ると、真っ赤に染まっていた。

「私を、あなた色に染めてくれてありがとう」

ペロリ、と腕を舐めてみる。

どこか懐かしい鉄の味。

美味しくは、ない。

でも、私に彼が浸透する。

彼は、私の血肉となって、これからずっと一緒に生きていく。

「すき。好きです」

今度は、ささやき声ではなく、しっかりと声にのせて言えた。

私の中で、彼も返事をしてくれている。

そんな気がして、私は少し嬉しくなった。